

都留文科大学報

第111号

2009年
11月25日(水)

編集 都留文科大学広報委員会

〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 都留文科大学内
☎0554-43-4341 URL: <http://tsuru.ac.jp/>

新学科長 抱負を語る 2

初等教育学科長 鶴田清司教授
国文学科長 新保祐司教授
英文学科長 儀部直樹教授
社会学科長 前田昭彦教授
比較文化学科長 大辻千恵子教授

英語圏事情研修を終えて 6

英文学科 鷺 直仁教授
英文学科3年 塘 秋歌/比較文化学科3年 松本裕典

学外で学ぶ 8

初等教育学科 中井 均教授/地学ゼミ3年 坂田次郎
国文学科 田中 実教授/国文学科3年 粕尾 藍
英文学科 鷺 直仁教授/英文学科3年 佐藤嘉美
社会学科 渡邊豊博教授/社会学科4年 吉本幸子
比較文化学科 笠原十九司教授

教育実習を終えて 13

初等教育学科3年 押田夏季
国文学科4年 宮坂佳那
社会学科4年 二宮勇貴

フィールドインターンシップスタート 16

社会学科 環境・コミュニティ創造専攻3年 今村 航

インターンシップ学校報告 17

社会学科 環境・コミュニティ創造専攻3年 後藤由貴子

講演会だより 18

英文学会・英文学科共催 春季講演会
大学院英語英米文学専攻主催 講演会
国文学科・国語国文学会共催 春季講演会
社会学科・地域社会学会共催 前期講演会

文大だより 22

第54回桂川祭 22
第5回東アジア競技大会日本代表に長倉由佳さんが決定 22
本学準硬式野球部1部リーグ 春・秋連覇 22
県民コミュニティーカレッジ分担講座 23
市民公開講座 23
同窓会が公立大学法人設立記念屋外時計を寄贈 23
現職教員教育講座/教員免許状更新講習 24
秋季オープンキャンパス報告 24
図書館だより 中学生 本学図書館で職場体験!! 25
前期修了者卒業式 25
本 ぶんだい堂 26
編集後記…重富恵子 26



第36回鶴鷹祭



第54回桂川祭 (学長と鍋ろう)



市民公開講座



準硬式野球部1部リーグ 春・秋連覇

新学科長
紹介

新学科長 抱負を語る



今年4月に公立大学法人都留文科大学が設立されたことに伴い大学組織も改編され、それまで各学科に配していた学科主任は学科長へと改名され、同時に教育研究審議会の中軸を担う委員の役職も担うこととなりました。ここでは各学科で新たに学科長に就任された皆さまからこれからの抱負を語ってもらうこととしました。

よき伝統を受け継ぎつつ
新たな地平をひらく初等教育学科長
鶴田清司

法人化にともなって新学科長となった（実際は学科主任からの留任である）。その重責に堪えられるか心許ないが、学科の発展のために微力を尽くしたい。

言うまでもなく、本学科の目的は、すぐれた小学校教員の養成にある。学科創設以来、多くの卒業生を送り出してきた。全国各地の学校現場で活躍しており、教育界において

高い評価を得ている。この伝統を受け継ぐことが私たちの使命であろう。

昨今、子どもと教育をめぐる情勢は厳しいものになっている。そのなかで、単に教員免許状の取得だけを目的にするのではなく、深い子ども理解に立って豊かな学びを成立させることができるような教師の養成が求められている。そのための一つの取り組みとして、現在、都留市内の小・中学校における学習支援を通して「子ども体験」の深化をめざす「学生アシスタントティーチャー（SAT）」が行われている。参加した学生たちは子どもたちの現実と向き合

うことで多くのことを学んでいる。まもなくカリキュラム化される「教職実践演習」も視野に入れて、SATの一層の充実を図っていきたい。

一方、小学校教師に必要とされる専門的力量とは何か、そのために本学科の理念、入試方法、カリキュラム、講義内容・方法は適切かという問題も常に検討していくべきであろう。先に述べたように、深い子ども理解に立った指導・援助ができる教師を育てることはもちろんであるが、さらに言えば、教師の最も重要な資質・能力として、自らを不断に高めていくための自己学習力（学び続ける、学び

新学科長紹介

新学科長 抱負を語る

活力ある学科運営

国文学科長
新保祐司

国文学科は、来年（2010年）に創設50周年の大きな節目を迎えます。

創設以来、多くの先輩教員をはじめ、事務局の方々や卒業生の皆さんのご努力、ご支援があって、今日のような立派な国文学科に発展することができたのだと思います。

このようなすばらしい伝統を持った国文学科を、この4月からの独法化を機にさらに充実した学科にしていくために、活力ある学科運営を心がけたいと思います。

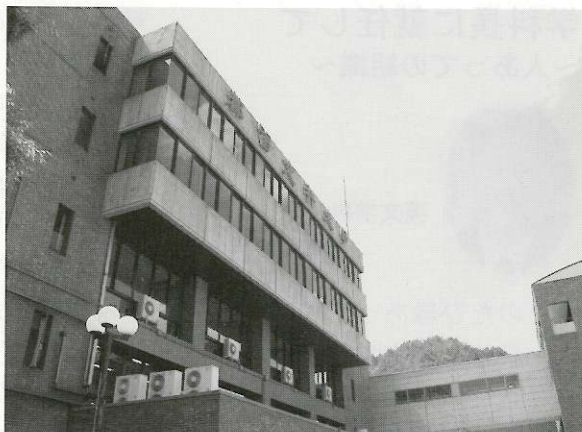
とりくむべき課題は、たくさんありますが、その中でま

ず対処しているのが、高等学校国語科教員を志望する学生の実力養成です。

創設以来、国文学科では、中学校、高等学校の教師になる卒業生を数多く出してきましたが、近年、諸般の事情により、減少傾向にあります。

そこで、高等学校国語科教員を志望する学生の実力養成に注力する特任教授の採用を考えています。

この点に対するとりくみは、国文学科の魅力の向上につながるだけではなく、本学全体の受験生の動向によい影響を与えるものと期待しています。



創設50周年記念事業としては、記念論文集の刊行を計画しています。記念論文集は、すでに他の学科でも出されていますが、国文学科の場合、50周年といった大きな節目でもありますので、専任教員のみではなく、名誉教授の方、卒業生で他の大学等で、専任教員として教育研究にあたっている方にも参加していただく形のものにしたいと考えています。

まさに、国文学科の50年の歴史の成果の一端がうかがえる大部な本になります。

また、50周年を記念して、卒業生の方々に久しぶりに本学に来ていただき、旧交を温めるよい機会となるパーティーを企画したいと思います。

50周年を節目として、足元をしっかりと固めつつ、次なる発展を期して、学科全員でいろいろと知恵を出し、やるべきことは大胆にかつ着実に実行していきたいと考えていますので、ご理解、ご支援のほどよろしくお願い致します。

合う姿勢）の大切さをあげておきたい。教師とは単に「教える人」ではなく、「学び続ける人」「学び合う人」でなくてはならない。そうでないと、子どもたちに質の高い学びを保証することができない。大学の講義や演習では、そのための意欲や態度や方法を養うことが重要である。

さらに、「～に強い教員」という明確な教師像を実現していくことも必要であろう。近年の入学者選抜方法の多様化はそれに向けてのメッセージである。一定の質の受験者の確保のためには、教員のみならず学生・卒業生も巻き込んだ大学全体の努力が必要と

なろう。

みなさまのご支援・ご協力を切にお願いしたい。



新学科長紹介

新学科長 抱負を語る

学科長に就任して
～人あつての組織～

英文学科長
儀部直樹

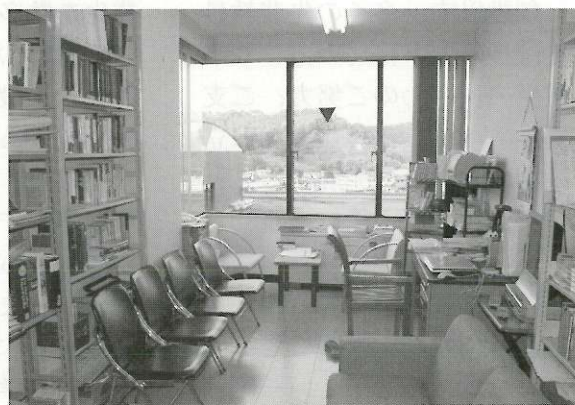
このたび縁あって私は、法人化最初の英文学科長をつとめさせていただくことになりました。就任が予定されたころから現在までずっと私は、「自分の力はとても小さいもの」と思っております。とりわけ組織の変革を前にしてしましたので「ほんとにこの自分ではどうなのか・・・」という不安だけを正直もっておりました。そこで就任直前の3月末に私は、自分は今後「調和の精神」と「感謝の心」で周りの人々と接し学科、大学運営にたずさわって行こうと心に決めました。おかげさまで学科の先生方、事務局の職員の方々にはこれまで日々多大な協力をしていただき半年を無事に過ごすことができました。一例をあげますと、9月に実施した学科初のAO入試では、質の高い生徒が数多く受験してくれました。これも一重に教員と事務局の知恵と努力の結果である、と感謝しております。

英文学科は、「実用的な英語力」と「深い教養に裏打ちされた英語力」の2つを涵養する場です。この伝統的な教育理念、精神はこれまで一度も途絶えることなく受け継がれ、着実に実践されてきました。教員一人一人の学生に

対する熱心な教育指導、それから学生自身の高い向上心、という双方のたゆまぬ努力は本学科の誇れる財産です。それは全国に広がる優れた卒業生のネットワークという形にもあらわれております。

本学は「より良い大学作り」のために法人化のスタートをした、と私は信じております。大学という組織は、「研究し教える側」である教員と「学ぶ側」である学生とその両者を支える「事務局」というすべて「人」で成り立っています。

「人あつての組織 (Organization is made of people)」です。調和の精神、つまり互いに相手を大事にして、良い知恵を出し合う、という思いで大学がこれまで以上に発展することを信じて、私は私のできるささやかな仕事をしていく所存です。



研究室からの風景

2 専攻化の意味すること



社会学科長
前田昭彦

社会学科が再編されてから3年目になる。

そもそも「地域社会の学際的・総合的な研究」を掲げて1987年に社会学科は創設された。20年後の2007年の社会学科再編の議論は、基本的に学科外部からの強い要請(主として「定員増」という方向)に学科として応じたものだ。しかしながら、再編の中身については、学科で熟考してきたプランにそっており、そういう意味では学科の主体的動機によるものでもあった(「社会学科再編について」学

報101号)。

誤解を恐れず当初の理念をもじって言うと「地域社会の学際的研究から、地域に主体的に関わる実践的研究へ」「地域社会の総合的研究から、現代社会の総合的研究へ」向けた再編だろうか。言うまでもなく前者が環境・コミュニティ創造専攻、後者が現代社会専攻。

その意味の一端の私見を述べたい。

そもそも従来の社会学科では、社会的問題に関心を強く持っているがいわゆるモラトリアムで専門性を留保したい高校生(多数)に混じり、明確にフィールドに出たいという意識を持つ少数の高校生が来る(そのコアは今泉吉晴元教授のゼミを受験時から志望

新学科長紹介

新学科長 抱負を語る

学科長に就任して

比較文化学科長
大辻千恵子

本学が独立行政法人化された一年目の学科長として、慌ただしいスタートをきりました。前期はめまぐるしく過ぎたように思います。大学の運営体制が大きく変化するなかで、学科の特色をだしていくことが一層問われているように思います。学科の発展に微力ながらも努めていきたいとします。

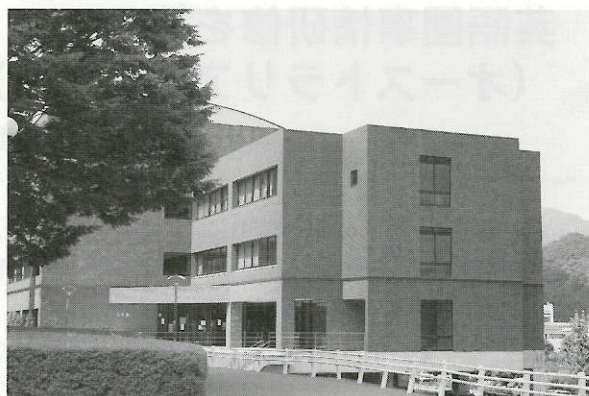
比較文化学科が創立10周年を迎えた2003年から、早いもので6年目に入りました。

していた、というように)、ということだったと思っている(とはいえ、前者が入学してから、フィールドに目覚めるという例も相当あった=このことの意味は、実はたいへん重要である)。2専攻化は、前者を現代社会専攻でしっかり受け止めつつ、後者を環コミで引き受け育てたいという意志を強く世間に示し、従来少数だった枠を大幅に拡大したことだ、と思っている。実は、学科で独自に実施している新入生アンケートでもこの傾向ははっきり表れている、と私は考えている。

この基本認識は学科で必ずしも共有していない(なかなか、こういう基本問題が議論する時間がない、というのも学科の課題だ)。もし正しい

学科の基本理念は国際性・現代性・学際性ですが、この間にカリキュラム改訂もあり、カリキュラムの柱も明確になりました—比較文化の視点と方法・現代世界の構造と動態の分析と把握・諸地域の文化や社会の具体的理解・文化間や社会間の相互関係の総合的把握・語学力や資料調査力の習得—。既存の学問領域を横断する比較文化研究の充実したカリキュラムになれば、と思います。今後は留学や語学、日本語教師養成のプログラムなど、さ

なら、カリキュラムの改善(例えば環コミに理論の強化/現社にフィールドの機会充実)、入試戦略にも重要な判断材料になるのではないかとと思っている。



らに充実すること、また教員相互の研究交流も一層望まれるところでしょう。

学科は国内外で積極的に文化交流をおこなう学生を文化交流助成金で応援していますが、国内外で独自に計画を立て調査をしたり、多様な企画や訪問先、プロジェクトを発掘する学生が着実に増えています。国内でも先住民サミットや国際映画祭など多様な文化交流の機会も増えてきました。学生時代に多くの交流体験をし、将来につなげてほしいものです。在学時代の交流体験を生かし、多方面で卒業生も活躍されています。

アメリカ史研究者として、学科長就任の2009年は、オバマの大統領就任とキング・オブ・ポップのスーパースター、マイケル・ジャクソン(MJ)の急死で、決して忘れられない年ともなりました。「黒人」初の大統領、身体改造を繰り返し「黒人性」に挑戦し続けたとも言えるMJ、彼らの存在はまさしく比較文化であること、そのダイナミズムさを一人でも多くの学生に知ってもらいたいものです。

特 集

英語圏事情研修を終えて
(オーストラリア・ヌーサ)

英文学科教授 鷲 直仁



英文学科では、英語が母国語・公用語として用いられている国・地域の生活・文化・制度などについて、本学の学



明るく礼儀正しい生徒たち
聖トマス・モア・スクールにて。

生が見聞を広められるように、毎年、英語圏事情研修を実施しています。このプログラムは、全ての学科の学生に開かれており、毎回様々な学科の学生が多数参加しています。

ホームステイを中心に、現地での生活を実体験し、語学研修・小旅行をすることで滞在国外の実情を学びます。単に知識を増やすだけではなく、ホストファミリーとの交流や現地の自然に触れることで、学生の感性を磨きます。

今回は、8月30日から、9月9日まで、オーストラリア・ブリスベン近郊のヌーサで事情研修を実施しました。治安の良いオーストラリアの中でも、とりわけ安全かつ静かなヌーサでホームステイができるのは、初めての海外滞在を経験する大半の参加者にとって、非常に有益であるといえるでしょう。

語学学習の教室は、幅100メートルほどの川沿いにありました。その川はすぐ海に繋がっています。窓からカーヌーや釣りをする人々を眺め、風を感じながら勉強する経験も貴重でした。今回は全日程を通じて天候にも恵まれ、

オーストラリアでコミュニケーションを学ぶ

英文学科3年 塘 秋歌

今夏8/30から9/9までの10日間大学のプログラムでオーストラリアのヌーサに行きました。初めての海外で生活に慣れるか、英語が聞き取れるかなどとても不安でした。なかでも一番心配だったのはホームステイです。ファミリーは日本語を全く理解できないという状況だったので、必然的に英語でコミュニケーションを取るという形になりました。最初は、聞き取れても説明したり自分の気持ちを伝えることができずにとってももどかしく、悔しい思いをしました。しかしなんとか単語をつなげて話していくうちに段々話せるようになってきて、ファミリーと上手くコミュニケーションが取れるようになってゆきました。最後はほとんど一回で聞き取れるようになり、会話も長く続くようになったので、とてもうれしかったです。

またファームステイなどいろいろなアクティビティも体験しました。小学5年生ぐらいの子供たちに日本の文化を教えるという体験は、教員を目指している私にとって、とても価値のあ

るものでした。オーストラリアの子どもたちはとても元気よく、教えている私も、とても楽しかったです。

今回の研修で、海外でコミュニケーションを取るためには、自分の気持ちを伝えようとする気持ちが大事なんだと分かりました。なかなか伝わらないからと消極的になるのではなく、あきらめずに挑戦することが大切だと思います。今回の研修は、たくさんのことを学んだとても貴重な体験でした。



大好きなホームステイファミリーと（中央が本人）

英語圏事情研修を終えて

オーストラリアの風景が、よりはっきりと記憶に残った気がします。現地の聖トマス・モア・スクールで、オーストラリアの小学生に日本文化を英語で教えるという経験は、学生たちにはとても新鮮だったようです。私たちが学校に到着するやいなや、生徒たちが一斉に集まって来て、大きな声で「コンニチハ!」と挨拶があり、すぐに一緒に長縄跳びが始まりました。生徒たちの育ちの良さを感じましたし、教室での日本語ゲームには非常に興味を持ってくれました。この他にも、ヌーサから車で一時間ほど走ったところにある農場で滞在もしまし

た。夜、Brisbane International Academyの川辺さんから教えていただいた南十字星を探しながら、全員で銀河を眺めました。オーストラリアの農業を肌で感じたファーム・ステイでした。最後の授業では、教室にホームステイ・ファミリーを招いて、総仕上げの英語のスピーチを一人ずつ行いました。全員が堂々としたスピーチをしていたのは、異国での生活によって逞しさが加わったからだと思います。ファミリーとの別れの場面では、多くの学生が涙を流しま



ファーム・ステイにて（やや怖がりながら）

した。

帰国して2ヶ月ほど過ぎましたが、参加してくれた学生は、学内で出会うといつも笑顔で挨拶してくれます。同じ時を過ごした連帯感があるのでしょうか。今後の彼らの成長が楽しみです。

そうして日本の良さを知る



比較文化学科3年 松本裕典

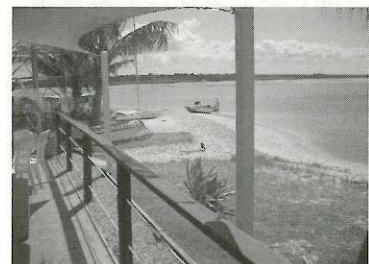
左が松本君

成田空港の喧騒が私を現実世界に引き戻した。ああ、ここは日本だなと思う。8月30日から9月9日までの11日間、私は本学の「英語圏事情研修」に参加し、オーストラリアを訪れた。言葉も文化も違う国でふだん体験できないようなとても濃い日々を過ごすことができ、日本に帰りたくはなかった。けれどあろうことかあれからもう一月以上が経ってしまったというのだから驚くほかない。

私たちが訪れたのはヌーサというブリスベン空港からバスで2時間ほどのところにある町。その色は瞬きさえ惜しみたくなるような目を疑うほどの青。海にビーチに国立公園、ショッピングストリートなど観光要素盛りだくさんのリゾートである。着いたその日から初めてのホームステイ。ホストマザーに「ここはサンシャイン・コーストなのに今日は生憎の天気ね」なんて冗談を言われながらも微笑むことしかできない。その意味も、今日が曇り空だってことも理解できたけれど、こんなときなんて答えればい

いのだろう。これから英語漬けの毎日が始まる。そんな1日目。それから現地の小学校の日本語クラスで日本文化を教えたり、一緒になって騒いだりの3日目。餌やり、乳搾り、鞭にブーメランそして天体観測までファームステイを満喫した4日目、5日目。6日目と7日目にはホストマザーがオーストラリア動物園へ連れて行ってくださったり、ホストファミリーのご実家にご招待してくださったり。数えきれないほどのアクティビティがこの数日間で私を豊かにしてくれ、英語でのコミュニケーションも少しずつ取れるようになっていった。

短いあいだだったけれど本当に来てよかったと思う。滞在中に英語でつけた日記や英語レッスンのノートは私の宝物である。それからもちろん一緒に参加した8人の仲間と先生方、オーストラリアで出会ったすべての人々を忘れてはならない。そしていつかは私の夢である日本語教師として再びこの地に舞い戻りたい。いま日本人でよかったと思うのだった。



教室の外の風景（ヌーサ）

学外で学ぶ

初等教育学科

世界ジオパークで夏合宿



初等教育学科教授
中井 均

地学は地球や宇宙を対象とする自然科学で、実際の自然に接する経験をもつことが大切です。その意味で初等教育学科地学ゼミでは毎年、地学的な自然観察と親睦を兼ねたゼミ合宿を行っています。昨年は福島県磐梯山と阿武隈鍾乳洞、一昨年は箱根火山周辺の見学を行いました。今年は、8月22日に日本初のジオパークに認定された新潟県糸魚川を中心に見学しました。ジオパークは地球活動の遺産を主な見所とする自然の中の公園で、ユネスコの支援により2004年に設立された世界ジオパークネットワークにより、世界各国で推進されています。詳細は日本ジオパークネットワークのHP (<http://www.geopark.jp/>) をご覧ください。

教科書だけではわからない リアルな自然に感動

地学ゼミ3年 坂田次郎



9月1日～3日の3日間、長野県と新潟県においてゼミ合宿を行いました。岩石調査を初めとして、新潟県から静岡県に存在するフォッサマグナ（大きな溝）を甲府盆地から新潟県の糸魚川まで車で北上しながら調査を進めていきました。

初日、木崎湖周辺での岩石調査では、月長石、通称ムーンストーンと呼ばれている鉱物を含む石の調査から始まりました。ここでは溶結凝灰岩からなる石を調べてサンプルを掘りました。次に来馬という場所で、地帯りの見学および植物の化石を掘りました。植物の化石は私たち学生が見てもとてもわかりやすく、自分で探しても意外にも発見することができました。2日目は前日と異なり、見学地一帯のフォッサマグナということに関して学びました。午前は、どのようにしてフォッサマグナができたのかななどを、現場を歩いて先生に説明をしてい

ただきながら見学を進めていきました。現地では北アメリカプレートとユーラシアプレートとの間にできた活断層（糸魚川－静岡構造線）を直接見学しました。つづいてヒスイに関連して長者ヶ原遺跡公園の見学をしました。ここは縄文時代にヒスイ製品の生産や交易の拠点となっていた場所で、まさにヒスイの故郷といえる場所でした。最終日には橋立ヒスイ峡を訪れました。現在は国の天然記念物としてヒスイを持ち帰ることができなくなっていて、大部分のヒスイは展示用に博物館などに移されています。ヒスイを発見することはできませんでしたが、近くの河原で石灰岩に含まれているフズリナの化石を探しました。石灰岩を探すとほとんどのものに化石が含まれていて、石灰岩の

特徴がわかれば簡単に発見することができました。

3日間を通して岩石調査およびフォッサマグナの成り立ちの調査を進めていきましたが、私にとってはすべてのことが初めての経験、新しい発見ばかりでした。地図では何もわからないが現地を調査することでフォッサマグナのような場所があり、その土地の成り立ちを垣間見ることができ、また石を見ることで、その石がどのような環境で形成されたかがわかるなど、文献を通して勉強していくことは必要ではあるが、ゼミ合宿などを通して、現地に実際にいって調査をして学んでいくことも知識を深めていくにはとても重要であると改めて認識しました。



地学ゼミ'09合宿にて

学外で学ぶ

国文学科

合宿のこと

国文学科教授
田中 実

思えば夏の合宿は今年で30回目、我ながらマンネリと言わざるを得ない。初期は車で研究室の本を運んでいたが、それも今は昔、と言っても、合宿中は2泊3日中文学の話をし続けている。春合宿を始めたのは5、6年前頃から、村上春樹の『アイロンのある風景』に海岸で焚き火をする場面がきっかけ、湘南に出

かけた。一晩海岸で話し込んだためか、次の日家に戻ると、急に熱が出て、うなされてしまった。もう焚き火はこりごりのはずだが、来年もやってみようか。写真は今年の春の江ノ島、来年はどこに行こう。



夏合宿を終えて



国文学科3年 粕尾 藍

私たちのゼミでは、8月24日から26日にかけて2泊3日でゼミ合宿を行いました。

朝駅に集合して電車で東京の宿まで向かい、午後からは4年生の先輩方の卒論の中間発表が始まりました。大まかな卒論の構想から作品の内容に関してまで、発表を一人につき約一時間程度の予定でしたが、議論が白熱し、一時間で収まらないこともしばしばありました。しかしそんな真面目な空気の中でも、先生が仰った言葉で時々笑いが起きるなどほどよい緊張感の中でゼミを行うことができました。またそれだけでなく、個人から先生に質問を行う時間もあったため、自分自身の疑問点についても深く考えるよい機会になりました。

2日目の昼間は1日目に引き続き先輩方の発表、そして夜にはコンパを行いました。普段のゼミではあまり関わる機会のなかった先輩や同輩とも、お酒を飲みながら楽しく

話すことができゼミ生同士の仲も深まったのではないかと思います。今回の合宿には欠席していた先輩が手作りのお酒を差し入れしてくださり、大変美味しいお酒でそれについても大いに盛り上がりました。3日目には3年生が卒論に向けて後期から扱っていく作品についての発表が控えていたため、同輩とお互いの作品について話したり、先輩からもアドバイスをいただくことができとても有意義な時間になりました。

3日目は後期から始まる3年生の発表に向けて、順番や作品について話し合いをしました。この合宿までに何を扱うか考えてくるとというのが3年生の宿題だったのですが、まだ迷っている人も多いようでした。私自身もいくつかの作品で迷っていたのですが、合宿中に様々な

ことを考えたり先生と対話をしたりする中で、一つの作品に決めることが出来ました。そして先生から作品の読み方についてのお話があったあと、解散となりました。本当はこのあと、先生おすすめの散策コースへ行くことが予定されていたのですが、諸事情により中止になり残念でした。

私にとっては初めてのゼミ合宿だったのですが、一日に何コマもゼミを行うというのはなかなかハードなものでした。でもその分様々なことを知ったり考えたり、充実した3日間になりました。これから一回一回のゼミを大切に、作品に向かい合うことの出来る力をつけたいと思いました。



田中ゼミ 夏合宿にて

学外で学ぶ

英文学科

カナダで学ぶ



英文学科教授
鷺 直仁

本学学生は、学外でも熱心に学んでいます。英文学科3年の佐藤嘉美さんは、夏休みにカナダのKelownaで英語と英語圏文化を学んで来ました。日本から一歩出ると、日本の常識が通じない生活があります。そして、その生活を体験することは、私たちが日本に生きるということの意味を問い直すきっかけとなります。都留での学びが、一層深まることでしょう。

カナダ・Kelownaで学んだ日々

英文学科3年 佐藤嘉美



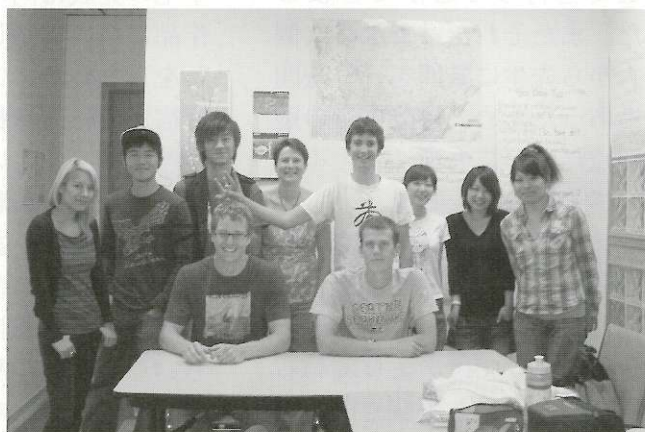
私は、3年の夏休みを利用して二ヶ月間、CanadaのKelowna (British Columbia州) に短期留学へ行ってきました。その間International Gateway Kelowna (IGK) というE S L専門の学校へ通い、ホームステイをしていました。Kelownaは小さな街ですが、オカナガン湖という大きな湖があるためビーチがたくさんあり、気候は雨が少なく、気温も穏やかです。小さいところですが、Vancouverほど知名度もないため、東洋人が非常に少なく日本人留学生にとってはとてもいい学習環境だと思

います。IGKはmallの二階に入っている小規模な学校で全校生徒は、30~40人ほどでした。E S L専門の学校ということで、世界中から生徒が来ていて、お互いに自分の国の文化を教えあったり、たまに自分の国の言葉を教えあったりして、英語以外にもたくさん学ぶことができました。放課後や休日も、友達と遊んだり、ホストファミリーと進んで話すことで、生きた英語を使ってコミュニケーションをとることができ、自分にとってプラスになりました。留学中はたくさんの驚き、楽しみがありました。私は毎日バ

ス通学していたので、バス停でバスを待っているとセキュリティの人やバス待ちをしている人が声をかけてくれ、英語を学びに来てると言うと、皆、「じゃあ私と話そう！」と言ってくれて、いろいろな人とコミュニケーションをとることができました。地元の人が、気軽に一緒に楽しもう！という雰囲気だったので、どこへいっても楽しく過ごせたことはKelownaならではのことだったと思います。2ヶ月間で劇的に語学力が向上したわけではないですが、大学で学んだことを活かすチャンスにもなりましたし、これからの学習に対するモチベーションがあがったので思い切って留学してよかったと思います。



カナダのホストファミリーと（右端が本人）



教室にて（右から2番目）

学外で学ぶ

社会学科

グラウンドワークの本場で



社会学科教授
渡邊豊博

グラウンドワークは、英国発祥の市民・NPO・企業・行政のパートナーシップによる環境改善活動です。今回そのイギリスの実際の姿を、吉本さんに体験していただきました。

イギリスのグラウンドワーク
を見学して

社会学科4年 吉本幸子



私は、9月7日から8泊9日の日程で行われた、イギリススタディ・ツアーに参加し、グラウンドワークの活動を中心に学びました。グラウンドワークとは、1980年代初めにイギリスで始まった市民・行政・企業のパートナーシップによる実践的な環境改善活動・地域再生活動を指します。イギリス国内に47あるトラストは「コミュニティ」、「教育」、「雇用」など幅広いテーマを設け、それぞれの地域にアプローチしています。ツアーの前半では、バーミンガム北西部にあるグラウンドワークブラック・カントリーを訪問し、同世代の若者と環境活動を通じた交流を行いました。3日間の滞在では、ブラック・カントリーで行われているGAP (Graduate Apprentice Programme) スキームを中心にお話を伺いました。

これは、大学卒業者を対象にした経験重視の6ヶ月の研修プログラムで、最終的な目標は職を得ることです。背景

には失業率が高く就職が困難であることや、スキルと経験を重視した労働市場があります。参加する若者はボランティアという立場ですが、期間中は環境に関わるプロジェクトを担当したり、補助金の申請書類作成など具体的な経験を積みます。GAPは大学で学んだ論理を実践に移す場なのです。これらの実践活動は企業からの評価が高く、プログラムの終了時には80～90%の就職率という高い成果を生み出しています。また、活動が人口減少への歯止めと、地域の暗いイメージの払拭につながることを地域住民は期待しているようです。

その他、ミュージアムで地域の歴史を学んだり、環境活動の実践の場となっている環境センターを訪ね、見学や作業の体験で汗を流しました。また、今年はホームステイの機会を設けていただき、イギリスの伝統的な料理をご馳走になったり、お互いの住む町について紹介したりと楽しく文化的な交流も行うこともで

きました。

ツアーの後半には、国立公園に指定されている湖水地方に足を延ばし、フット・パスを歩きながらナショナル・トラストについてのお話を伺いました。イギリスでは歩く権利が認められていて、100年以上前から私有地・共有地を問わず歩くことを楽しむための散策路としてフット・パスが整備されています。フット・パスからはその地域に暮らす人の生活に必要なものだけの、景観を壊すものが無い美しい湖の風景を眺めることができました。これも、ナショナル・トラストによる保護活動の成果の1つなのでしょう。

若者との交流を中心に今回の交流を振り返ってみると、彼らの活動の軸になっているのは地域のために働きたいという思いや、地域を変えたいという思いのように感じます。私たち日本の学生も、イギリスの若者を見習わなければならないのではないのでしょうか。これからの地域を担って行くのは、私たち若者なのですから。まずは、良い点も悪い点も含めて地域を知ることから始めていきたいと思います。

学外で学ぶ

比較文化学科

海のシルクロード・
琉球弧を行く比較文化学科教授
笠原十九司

11日の午前、予定どおり鹿児島港へ到着することができた。

現在は、「東アジアの朝貢システム」「華僑と福建」「琉球弧における盆と墓」「台湾人のアイデンティティ」「日中戦争、アジア太平洋戦争下の台湾」「沖縄戦と基地沖縄」「国共内戦・東アジア冷戦と台湾」などのテーマを各自が選んで報告準備をしている。以下に参加学生の感想文の一部を紹介したい。

学生の感想から

「このフィールドワークに参加することで中国、台湾、沖縄に対するそれまでの認識を改めることができたし、福州や沖縄の古くからのつながりを知ることができた」(森田)。

「台湾で経験したことは私にとって、かけがえのない財産である。それまで、国家の問題や政治の問題などについて、日本のこと、中国のことさえまったく無知である私だったが、少しずつ、日本・中国・台湾という比較思考で問題を考えるようになった」(曾)。

「このフィールドワークに参加して本当に良かったと思う。特に、台湾には日本の跡が数多く残っており、日本の

統治時代のことも感じることができた。また、中国との関係や、今の台湾の色々な側面をみることができた。今回、中国、台湾で見て感じたことを忘れずに、さらに台湾の歴史や歴史観について調べていきたいと思う」(中村)。

「私自身、中国・台湾と行った中で、街の雰囲気や人々の表情などから別々の異なった国であると実感した。しかし、経済構造などの問題が複雑に絡まり、独立問題をより難しくしている。この問題については、さらに詳しく知り、さまざまな角度から自分なりに考えてみたいと思ったので、卒業論文のテーマにすることにした」

(佐藤)。

「今回のフィールドワークに参加し、台湾が以前に思っていたよりも、もっと複雑な歴史、事情を持ってい



台北市中の廟、台湾は廟信仰の宝庫

ることが分かった。そして実際に台湾を訪れ、史跡を見学したり、現地の人の話を聞いたりすることで、より一層台湾に対して興味をそそられ、もっと深く知りたいという気が湧いてきた」(大場)。

「今回のフィールドワークでは、初めての体験が多く、小さな文化の違いや、人や雰囲気の違いなどから、当たり前ながら日本じゃない！と感じさせられたことが多くあり、私にとってとても刺激的なものだった。中国と台湾では、似ているようで違うような多くの発見があった。日本・中国・台湾のこれからの関係について興味が湧いた。疑問に思ったことも多くあったので勉強していきたい」(三井田)。



馬祖島：大陸反攻へ備えた海軍基地であった北海坑道の入口

教育実習を終えて

初等教育学科



教育実習を終えて

初等教育学科 3年 押田夏季

教育実習は不安だらけでしたが、この1ヶ月間はとても内容の濃いものになりました。私は、子どもたちにとっても自分にとってもお互いに最高の時を過ごしたいという思いを持って教育実習に臨みました。毎日意気込んで実習に臨みましたが、実際はうまくいかないことがほとんどで、心が折れてばかりいました。しかし、実際に教育現場に入らせていただいて、折れている暇は全くなく、少し強くなれたように思います。また、自分の教師になりたいという思いを再確認することができました。実習に入った4年生のクラスの児童たちは、とても個性的な子が集まっています。毎日が大騒ぎでした。大学での机上の学習でしか、現場について学んでいませんでしたが、実習が始まると、やはり実際肌で感じてみないと分からないことがたくさんありました。同じ問いかけをしても一人ひとり違った反応を示したり、くっついてくる子もいれば、遠巻きに見ている子もいる。この子たちに、どうしたら児童たち一人一人と

仲良くなりたいという思いが伝わるだろうかと考え、毎日全員に笑顔で声をかけ、たくさん話をするようにしました。そうしていると、子どもたちが普段何を考えて、興味を持っているのか、クラスのまとまりはどうかなど、いろいろわかってきました。同時に子どもたちも、私のことを



図工の授業（4年生）

理解していき、そうする中で、少しずつ信頼関係が生まれていった気がします。授業でも、へたくそな授業を一生懸命聞いてくれるようになりました。子どもたちとの関係は、信頼のもとに成り立つのだなということが実感できました。母校での実習は、小学校時代の生活を思い出させてくれることもありましたが、子ども側の視点しか分かっていなかったもので、先生側の、子どもた

ちの生活を見守っている側の視点を知るようになって、教師の仕事の大切さを実感しました。

子どもたちとの、走りまわったり登ったり隠れたり笑ったり悩んだりしていた日々はあっという間に終りが来てしまいました。最後の日、図工の授業で、4年生の個性を1つに集めた作品をどうしてみんなに作ってもらったのか、私の気持ちを伝えました。子どもたちに伝えたかったのは、クラスが一つになるということの素晴らしさです。また、4年生のこの時は二度と

来ないから、今を大切に、思い切り一生懸命楽しんでほしいということも伝えました。子どもたちは少し照れくさそうにしていますが、きっと伝わっただろうと思います。最後に、子どもたちとさよならをするとき、「絶対に先生になって内郷に戻ってきてね」

「がんばってね」という嬉しい言葉を聞くことができました。「絶対なんて戻ってくるから！」と叫びながら、その時、やっぱり子どもは、自分にとって元気をもらえる存在なんだと実感しました。私にとって、今までにない最高の一か月を子どもたちと過ごす事が出来たと、実感しています。これから、子どもたちとの約束を果たすために、勉強頑張ります。

教育実習を終えて

国文学科



教育実習を終えて

国文学科 4年 宮坂佳那

私は母校の中学校へ教育実習に行かせていただきました。私は授業でもバイトでも人前で授業というものをしたことがなかったので、この教育実習は初体験の連続でした。

私が一番初めに行った授業は担当教科である国語ではなく、道徳の授業でした。緊張で声が震えるなか、生徒たちも私の緊張が伝わったかのようでとても静かな授業となりました。内容は、友達関係の教材を取り上げました。学習カードに生徒一人ひとりの意見を書き込んでもらったのですが、誰一人として白紙で提出する生徒がいなかったことがとても嬉しかったです。

1年生の授業では「麦わら帽子」という現代文を学習しました。1年生は元気のある子が多く、積極的に手を挙げてくれるのでとても助かりました。授業も生徒から自然に出てくる疑問を生かして、それをクラス全体で答えを見つけていくという授業をすることができ、生徒主体の充実した授業ができたと思います。また、私の担当教員の先生のご配慮で多くの授業時間をいただけたため、教育実習最後の授業では絵本の読み聞かせをしました。図書館の司書の方と相談して人気のある本を

何冊か選び、生徒の前で読んだのですが、絵本ということもあり、最初は抵抗のある生徒もいたようでしたが、読み始めたら意外と静かに集中して聞いてくれました。最近の本を読む子どもが減っていると聞いたので、絵本がきっかけになって物語に興味を持ってくれたら良いなと思いました。

2年生の授業では「字のないはがき」という戦時中の話を学習しました。戦争を通しての家族の絆などを書いた話だったのですが、生徒たちの感情移入がしやすい作品だったため、いい意見がたくさん出ました。2年生のクラスは一番授業回数が多いのに加え、給食や掃除、ホームルームなどにも参加させていただいて、一番仲良くなったクラスでした。そのため、授業も最初は固い雰囲気でしたが、日数が経つにつれて私も生徒たちに慣れ、生徒も私に慣れてプリント学習中の時間も気軽に話しかけてくれるようになりました。2年生は自発的な発言

が苦手な生徒が多かったため、学習カード中心の授業にしました。そんな授業の中で私が一番重要視したことは、机間支援です。生徒全員のプリント内容をチェックして、書けない子にはアドバイスをしました。また、授業終わりにはプリントを回収し、一人ひとりにコメントを返すことで授業中に意見を聞くことができなかった生徒の疑問や意見に答えました。

教育実習を終えて、私が感じたことは学校教育というものには授業のテクニックだけではなく、生徒との信頼関係も大切だということです。もちろん、授業が分かりやすくなければ生徒には信用されませんが、それ以外でも授業以外の時間に生徒と雑談したり悩み事を聞いたりすることで生徒との距離が縮まり、それが授業にも反映されることを実感しました。今回の教育実習で学んだ経験を今後に活かしていきたいです。



担当したクラスの生徒からの寄せ書き

教育実習を終えて

社会科学



教育実習で学んだこと

社会科学4年 二宮勇貴

今年5月、母校の高校で3週間、教育実習をさせていただきました。卒業してから3年。久しぶりに会う先生方や校内の景色はとても懐かしく感慨深いものでした。しかし、それ以上に、勉強に部活動に一生懸命な生徒の姿を見て「私もしっかり頑張らなくては」と実習のスタートにあたって強く思いました。

担当の学年は3年生でした。実習の期間が丁度、部活動の引退の時期に近かったこともあり、どの生徒も進路や勉強に対する意識が高まっていたようでした。そのこともあって授業の合間や昼休みには担当教科の内容だけでなく私の高校時代の勉強法などについての質問も多く受けました。

思い出してみると私が高校3年生だった当時、同じように教育実習にきた先輩方に大学について色々な話を聞いて進路目標や勉強への意識を高めたということがありました。そのことから、質問をしてきた生徒にはもちろん、周囲にいた他の生徒にも積極的に声をかけて、アドバイスをするように心がけました。結果的に生徒との関係も広がり、また多くの生徒と話をしたおかげで自分の視野を広げ

るきっかけにもなりました。

教科は日本史を担当しました。実習生と言っても、生徒にとっては先生であることに変わりはありません。また日本史は受験に必要な教科でもあります。しっかりと教材研究を行い、責任を持って授業に臨むようにしました。教えながら気がついたことは自分自身にとっては得意教科であっても、クラス内にはその教科を苦手とする生徒も多くいるということです。生徒の目線に立って「何がわからないのか、どうしてわからないのか」ということを考える必要があります。自分にとって当然のことが、決して誰しにも当然ではないということを改めて考えさせられました。

この他にも部活動や、文化祭に向けての話し合いなどにも参加させてもらいました。

自分が高校生だった頃と違う視点でこれら生徒の活動を見たときに、色々なことを考えさせられました。特に、当時、何度も反発した先生方の言葉が実習生という立場で考えると、正しいこ



懐かしの母校

とばかりだということを何度も思いました。私たちにとって、耳に痛かった言葉こそ大事な言葉だったのだと改めて思い、生徒にうとうしがられても、その一言が言える先生にならなくてはいけないのだと気がつきました。

3週間という僅かな時間でしたが、このように、たくさんのかんことを考えたり、知ったりすることができた、本当に有意義な実習でした。先生方にも多くのアドバイスをもらいましたし、生徒からも学んだことがたくさんあります。

今回の自習で学んだことを胸に気刻み、高校生の時に描いた夢を実現できるよう、これからも精一杯、頑張っていきたいと思います。



母校の教壇で

フィールドインターンシップ学校報告

フィールドインターンシップ **スタード!!**

社会学科環境・コミュニティ創造専攻では、実践領域で活躍する方々から、直接指導をいただく実習科目「フィールドインターンシップ」が今年度から始動しました。この授業では、第一に、環境保全や地域づくりに必要な日常的な業務の広がり把握すること、第二に、実践活動の現場が直面している様々な課題を把握すること、第三に、多様な参加者の中で、相手の意見を理解し、自分の意思を伝えるコミュニケーション能力を養うことなどを目的としています。夏休み前から、65名の学生たちが、5日～10日間の実習に挑戦しました。その奮闘ぶりのいったんをご紹介します。

静岡県庁での
フィールドインターンシップを終えて

社会学科 環境・コミュニティ創造専攻3年 今村 航

私は今夏のフィールドインターンシップを通じ、「行政は災害の被害軽減のためにどのように地域と連携し、あるいは地域住民間の連携を構築していくのか」を学ぶことを目的として、静岡県庁危機管理局危機情報室で研修をさせていただくことができました。研修初日に駿河湾を震源とする大きな地震が起こったこともあり、通常の業務に加え、災害発生時における県行政の機能や、県民の平穏な生活を取り戻すための支援の様子も目の当たりにすることとなり、大変多くのことを学ばせていただきました。

特に災害対策本部の見学に際しては、組織が正確に機能するためには、正しい情報を簡潔かつ迅速に伝えるコミュニケーション能力が必須であることを痛感しました。災害対策本部に集約された情報は組織内部にとどまらずに、マスコミを通じ住民へと伝わり、住民の生活に大きく影響を与えるからです。

研修中、特に感じた点を以

下に2つ挙げたいと思います。

第一に、「自主防災」にむけた取り組みの重要性です。現状では、行政や専門家が描いている震災予想と住民が描くそれとの間にはギャップが存在していること、またそのギャップは災害発生時に大きな混乱をひきおこすものとなっており、その縮小や解消をどのようにはかっていくかが行政の仕事としては重要です。その一例として、危機情報室では、二次災害への対応方法等を具体的に示す情報誌『自主防災』の発行を通じ、行政が「自主防災」の重要性を住民の方々に日常的に発信している様子を学びました。県民の皆さんの、情報誌への感想を分析すると、行政の意図が伝わっていることがうかがえ、取り組みの有効性が実感できました。

第二に、防災の啓発は子供に対して行うこともとくに効果的であることです。

以上のように、学ぶことが大変多い研修でしたが、むしろ、悩んだ点もありました。

防災センターでの親子防災教室開催のお手伝いをさせていただいた際、私ははじめ、住民の方々とどう接していいか戸惑いました。私はそれまで、公務員とは専門知識やコミュニケーション能力が卓越しており、参加された住民に対して完璧な対応をしなければならぬと思いこんでいました。そのため、相当、身構えていたのだと思います。しかし、公務員と住民という関係に縛られず、誠意をもって迅速かつ丁寧な対応をすればよいし、それが重要であると防災センターの職員の方に声をかけていただき、不安が解消していきました。

今回の実習を通じて、公務員として住民とともに、社会の枠組みをつくっていくためには、公務員試験対策の勉強だけでなく、組織の一員として機能するための協調性の向上、創造的であろうとする意欲をもつこと、さらに広い視点で物事を考える力を鍛錬する必要性を感じました。

インターンシップ学校報告

インターンシップでは、民間企業にも学生を派遣しており、派遣先企業の皆様には、最前線での業務の傍ら、学生のご指導をいただいております。ご指導をいただいた皆様には、この場を借りて御礼申し上げます。

さて、学生達は将来の夢と現実との間で、通常の講義では得られない経験、そして夢と現実とのギャップから、多くの教訓を得たようです。



インターンシップで得たもの

社会学科 環境・コミュニティ創造専攻3年 後藤由貴子

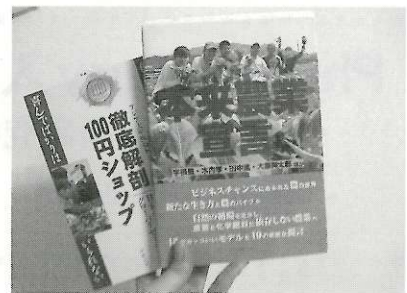
私の「編集者になりたい」という願いは中学生頃まで遡る。本が好きだから、出版に携わる仕事に就く。単純で純粋な願いが、頭のどこかにいつもあった。だが、ここ10年足らずの間に、ネットやその他の電子機器の普及によって、出版業界を取り巻く環境は随分様変わりした。ただでさえ狭き門と言われる編集者への道に、追い討ちをかけるような出版不況の波。だから、この出版社でのインターンシップは、正直、諦め気味になっていたところに舞い込んだ吉報だった。

東京・高田馬場、とあるマンションの一室にその会社はある。私がインターンでお世話になった＜コモンズ＞は、全国に4000はあると言われる、小規模出版社のひとつである。代表の大江さんが1996年に立ち上げて以来、数多くの学術書や実用書を出している。大江さん曰く、コモンズは“環境・農・食・アジア・自治”をテーマに掲げており、その形態も雑誌ではなく、長く読んでもらうために殆どの本が単行本であるそう

だ。素人から見ても、確かにコモンズの本には一貫性があり、確固たる主張を持って作られているのだと感じられる。

私が一日目、一番初めに行ったのは、本の袋詰め。それから沢山の仕事をした。名詞の整理、裏紙の分別、宛名書きや発注書のFAX、封書への判子押しなど。事務的なことも多かった。しかし、一番大変で一番楽しかったのが、ゲラのチェックだった。

「ゲラ」(ゲラ刷りとも言う)とは、本の著者が書いた原稿や編集者が手直した原稿を、印刷業者が実際の仕上がりに近い形で印刷したものだ。編集者のもっとも大きな仕事とは、著者と打ち合わせの上、そのゲラに加筆修正を加え、読者に読みやすい本に仕上げていくことである。つまり、編集者とは、最初の読者にして、作者と読者を繋ぐ者であるのだ。手を加えられた初校を見ながら、印刷し直された再校に間違いがないかチェックする。それが、私に与えられた仕事だった。初校には、誤字脱字の訂正はもちろん、内容の矛盾の指摘や、



諦められない夢だから、
きっとこの手で掴むと誓う！

文章バランス、図の配置などデザイン面まで事細かに訂正が入っている。美しく読みやすい文章にする一方で、決して作者の言っていることを歪めないこと。簡単そうに聞こえるが、実際、難しいことなのだ。編集者に最も欠かせないのは、コミュニケーション能力だと言われた。作者や印刷業者に的確に指示を出し、要望を聞き入れ、指揮を振る。その為には、その能力が何よりも必要なのだそうだ。インターンの期間中、自分がこれだけのことを出来るかと、何度も自問を繰り返した。

上述の通り、在庫整理などの事務仕事も沢山やった。その一つ一つの仕事の繋がりが、やっとわかって要領を得た頃、短い五日間が終わった。本当に、短いなあ、としか言いようがないのだけれど、とても充実して楽しい時間だった。こうして、夢を問い直す機会をいただいて、私なりの答えを見つけられたと思う。夏風が秋めく季節の五日間は、忘れられない時間だった。一年半後、歩む道がたとえこの業界で無かろうと、きっとこの経験は私の財産になると感じた。

講演会だより

英文学会・英文学科共催 春季講演会

Phraseology入門

～ 現代英語研究の新たな展開 ～

講師：八木克正 先生

英文学科2年 加藤早織



講師の八木先生

7月1日、英文学会・英文学科共催の春季講演会が開催された。講師は、関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科の教授である八木克正先生。演題は「Phraseology入門～現代英語研究の新たな展開～」であった。

「Phraseology」とは、「語法」、「表現法」と訳されるものであるが、今回この言葉を初めて耳にする人も多く、どのような研究がされているのか、あまり馴染みのない分野のように思われた。しかし、今回の講演では、Phraseologyとは何か、それが持つ役割や、現代の英語教育にどのように関係しているのかなど、質問を交えながらわかりやすく説明していただいたので、新たな知識を深める非常に良い機会となった。

先生のお話の中には、重要なのは細かい文法ではなく単語と単語のつながりであるこ

と、一つ一つの単語のつながりで様々な意味を表すことができることなど、非常に興味深い内容のものが多かった。特に、文法はコミュニケーションの上で大切ではあるが、現在の英語教育は、文法理解を目的にしがちであり、それにしぼられた状態になっていること、また大学などの入試に合格するためや、テストで良い成績をおさめるため、つまり試験のための学習になっていることなどが指摘され、文法よりも表現を重視した英語教育プログラムにしていくべきであるという先生のお考えが示された。多くの人がこれに共感していたようだ。

私自身、Phraseologyという言葉と意味をこの講演を機に初めて知った。難しい内容ではあるが、実は、日々英語を学ぶ私たちにとって身近なものであり、この講演会はPhraseologyについて学ぶ

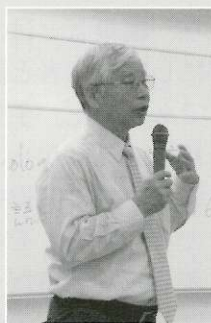
だけでなく、現在までの日本の英語教育を振り返り、今後の英語教育の在り方を考えることのできる有意義な時間であった。

今回の講演会には、将来、英語教員を志している人や、英語教育に関心を持つ学生が多く参加していたが、教育者の目線だけでなく、英語学習者の目線からも「英語」について考えることができたのではないかと思う。日本では、中学校、あるいはそれ以前から、英語を学習しているにも関わらず、思うように英語を話すことができないなど、コミュニケーションの面で自分の英語力に悩む人は多くいるであろう。今までの学習を見直し、この分野をこれからの英語学習の参考にしていくことができれば良いと考えた。

講師紹介

八木克正 (やぎ・かつまさ)

八木先生の専門分野は英語学・言語学・英語辞書学・英語音声学。所属学会は、日本英語学会、英語語法文法学会（前会長）、日本英語コミュニケーション学会（理事）、日本英語音声学（副会長）、大学英語教育学会等。御著書に、『英語の文法と語法—意味からのアプローチ』（研究社出版）、『英和辞典の研究—英語認識の改善のために』（開拓社）、『英語で自己表現 大学英語のフレッシュスタート』（英宝社）等がある。その他に、論文・学会報告多数。



講演会だより

大学院英語英米文学専攻主催 講演会

第1回 三上フォーラム

英文学科教授 西出公之

7月17日午後16時30分より都留文科大学3号館201教室において、二人のフルブライト留学生を招いた講演会「三上フォーラム」が開催された。

2002年12月7日に逝去した三上泰久（みかみ・やすひさ）都留文科大学名誉教授は、第1回のフルブライト留学生としてテキサス大学で学んだ。氏はこのような機会が与えられたことを生涯感謝し、遺産を日米教育委員会（フルブライト）に寄付した。その寄付は三上基金として運用されている。今年度は13人の米国人研究留学生にフルブライト奨学金が与えられたが、そのうち2人が三上基金によるものである。

「三上フォーラム」は、三上フェローを招いて留学の成果についての話を聞く機会として大学院英語英米文学専攻が企画・実施した。今回のフォーラムで講演したのは、インディアナ州のアールム大学を卒業して中部大学で日本文学を研究しているコリン・ヘイウッド（Colin Haywood）氏とコロラド州のコロラド大学を卒業して広島大学で高等教育論を研究しているドルー・フォスター（Drew Foster）氏の二人。

ヘイウッド氏の演題は、「樋口一葉の和歌：鑑賞と英

訳」であった。流暢な日本語で、「一葉の小説だけでなく、和歌も知られるようになって

欲しい」と熱く語った。氏は和歌を英訳するにあたって、五七五七七の音節構造をそのまま英語に移すのではなく、英詩の弱強五歩格の2行連詩という伝統的な形式を用いることにしたという。翻訳例として以下の二首が披露された。

秋夢

秋の夜の月二ふかしゝうたゝねはゆめのたゝも露けかりけり

An Autumn Dream

I doze by moonlight on an autumn eve;

The ways of dream are also dewed with tears.

な三風のありもあらずも何かせん一葉のふねのうきよ也けり

Life's storms and trials come and go, and I

Not but a leaf, upon a troubled sea.

フォスター氏の講演は、"Emerging Distinction in Japan's Newly Autonomous National Universities"のタイトルで、英語で行われた。アジアの諸国でも国立大学の法人化が行われてきたことについても触れつつ、いくつかの国立大学のケーススタディが紹介され、独立法人化後の国立大学が個々のアイデンティティを形成しつつあることが論じられた。フロアから、「改革・個性化」は成功しているのかという質問があった

が、これには「まだ結果は出ていない」との答であった。また「国立大学の個性化を画一的に進めるといふのは問題ではないか」という指摘があ

り、これがきっかけになって活発な質疑応答が行われた。

今回の「三上フォーラム」は第1回目ということもあり、日米教育委員会事務局長のディビッド・サタホワイト（Dr. David H. Satterwhite）氏、日米教育交流振興財団事務局長の大野 熙（ひろし）氏が来学し、講演会に先立ち高田理孝副学長らと会談した。三上フォーラムは、日本各地の大学で学ぶ若手米国人留学生を招いて今後も開催される予定である。



左から ヘイウッド氏、フォスター氏、大野氏、高田副学長

講演会だより

国文学科・国語国文学会共催 春季講演会

「歌木簡と万葉歌を中心に」

講師：毛利正守 先生

国文学科教授 鈴木武晴

2009年度都留文科大学国語国文学会春季講演会が6月24日、大阪市立大学名誉教授・現武庫川女子大学教授の毛利正守先生をお迎えして開催された。

毛利先生は日本古代の文学語学研究の第一人者で、伝統ある万葉学会の代表を経て、現在は古事記学会代表理事として学会と学問研究をリードされている。学問研究の姿勢は実証的で、特に万葉集の字余りの研究は、三十歳代で名誉ある金田一京助賞を受賞されるなど、高く評価されている。毛利先生の万葉集の字余りについての一連の研究によって、万葉集に視覚的・字余り・音韻的（韻律的）字余りはないことが決定的となったと言える。また、この研究は、万葉集の朗詠法の面に解明の光を当てたと言うこ

ともできよう。

主要著書に、万葉集の入門書『万葉事始』（和泉書院）、小学館日本古典文学全集『日本書紀』、『新校注万葉集』（和泉書院）などがあり、『新校注万葉集』は、万葉集の字余り研究の成果を取り入れた画期的な本文編で重要である。

今回の講演会では、「歌木簡と万葉集を中心に」と題してお話くださった。2008年（平成20年）5月22日、聖武天皇が造営した紫香楽宮（しがらきのみや）の跡地から万葉集の歌が墨書された木簡の断簡が発見された。その木簡の表と裏に残存する万葉仮名から、表には「難波津に咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くやこの花」の歌、裏には万葉集卷十六所収の「安積山（あさかやま）影さへ見ゆる山の井の浅き心を我が思はな



講師の毛利先生

くに」の歌が記されてあったことを丁寧に検証された。

この二首について、『古今和歌集』の仮名序に「難波津の歌は、帝の御初め也。安積山の言葉は、采女（うねめ）の戯れより詠みて、この二歌は、歌の父母の様にてぞ、手習ふ人の、初めにもしける。」と記されているが、仮名序の記された延喜5年（905）より約160年前にすでに一組として記されていたのである。土中からこの木簡が掘り出されたことは、日本文学史の一事項を塗り変える大発見と言える。

ご講演では最新資料の読解を示され、多くのことをお教えた。国文学科の授業の中に専門的な日本史の授業もなく、考古学資料を十分に研究するということも行なわれていないので、ご講演が学生たちにとって極めて新鮮かつ有意義であったことが、後に提出された感想文から知られた。本稿者もご講演に触発されて、表裏一体の木簡歌の意義について考えを深めることができた。ここに記して感謝申し上げる。

講師紹介



毛利正守（もうり・まさもり）

1943（昭和18）年、岐阜県生まれ。皇学館大学大学院修士課程修了。上代文学・語学専攻。

大阪市立大学名誉教授。武庫川女子大学教授。万葉学会代表を経て、現在は古事記学会代表。『万葉事始』（和泉書院）、『新校注万葉集』（和泉書院）、小学館新編日本古典文学全集『日本書紀』など、論文多数。万葉集の字余りの研究で金田一京助賞を受賞している。

講演会だより

社会科学・地域社会学会共催 前期講演会

平和は作れるか

講師：伊勢崎賢治 先生

社会科学教授 進藤 兵

地域社会学会の2009年度前期講演会は、7月15日（水曜）午後6時30分より8時すぎまで、2号館101教室にて、伊勢崎賢治氏（東京外国語大学教授）をお迎えして、「平和は作れるか」という演題で行われた。

地域社会学会では、5月から講演会の準備を始め、学生の討議により講演の内容と講師の候補をしぼりこみ、最終的に伊勢崎賢治氏に講演を依頼し、ご多忙の中、ご快諾いただいた。

21世紀に入って日本政府は、「平和構築」のために軍事力を活用する政策を選択し始めた。2001年のアフガニスタン戦争では自衛隊艦隊がインド洋に出動し、03年のイラク戦争では後方支援として武装自衛隊が外国領土に進駐した。そして6月、麻生政権のもとで海賊対処法案が国会で成立し、武装自衛隊がソマリア沖へと海外出動することとなった。さらに来年2010年5月には憲法改正国民投票法にもとづく9条改憲の国会発議が可能となる。こうしたなかで、私たちは「平和構築のための軍事力」という問題をどう考えたらよいのか、平和を平和的に構築できるのか、という問いをつきつ

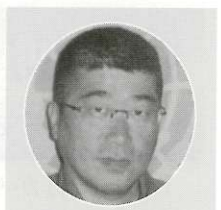
けられているといえよう。これが今回の講演会の問題意識であった。

講師の伊勢崎賢治氏は、武装解除・平和構築の理論と実践の第一人者であり、2000年東チモールでの国連武装解除責任者、03年アフガニスタンでの国連武装解除責任者などを歴任された。『武装解除一紛争屋がみた世界』（講談社現代新書、2004年）、『自衛隊の国際貢献は憲法9条で』（かもがわ出版、2008年）などの著書があり、NHKテレビ「爆笑問題のニッポンの教養」に登場するなど、学生にも知られている識者である。

地域社会学会では2回の学習会を開催し（第1回＝海賊対処法案の検討、第2回＝伊勢崎氏の著書の検討）、講演会当日に臨んだ。

講演は、レオナルド・ディカプリオ主演の映画『ブラッド・ダイヤモンド』で描かれたアフリカ西部・シエラレオネ共和国の内戦を話の導入として、伊勢崎氏の平和構築活動の原点ともいえる、同地1988－92年における国連現地事

務所での経験や、その後の内戦の勃発と大量殺戮、人々の心の荒廃、停戦後の命



講師の伊勢崎先生

がけの武装解除、元兵士たちの社会復帰支援の苦心などについて、臨場感あふれる口調で語られた。動画映像も使いながらの、リアルでたいへんわかりやすい講演であった。そして平和は大切だが壊れやすいものであること、平和構築にとって信頼こそ最も重要であり、それは軍事力ではつukれないこと、日本政府と日本人が世界各地での平和構築に果たしうる役割などについて、「一人ひとりが考えてほしい」という熱いメッセージが述べられた。

講演会当日は、学生・市民など100名ほどが熱心に聞き入り、質疑応答も活発に行われた。回収したアンケートには、「こういう凄惨な事実があったことをもっと知らなければならぬ」「私たちは、平和の問題を自分たちの問題として考える必要があると思った」といった声があった。



伊勢崎先生の代表著書

文大だより

第54回 桂川祭

テーマ：CHANGE！

10月29日から31日の3日間にわたり、第54回桂川祭が開催され、学内の各団体による模擬店や文化展、本学OB元（株）舞浜リゾートライン代表取締役社長竹内昭氏の講演会などが行われました。



今年のテーマは従来の企画からの変革を試みる意味から「CHANGE！」とし、地域の人たちとも協力した企画や環境問題に着目したリユース食器の導入など、いつもとは少し違うものとなりました。また、今年は木曜日からの開催のため例年より参加者も若干少ないものとなりましたが、会場内では終日天候には恵まれたため周辺地域住民や学生サークル関係者が集まり、最後の花火打ち上げは、月明かりの中この賑わいに華を添えるものとなりました。

第5回東アジア競技大会日本代表に 本学陸上競技部の長倉由佳さんが決定

9月28日付けの財団法人
日本陸上競技連盟からの通知



理事長と学長に激励される
長倉由佳さん（手前右）

によれば、本学初等教育学科4年の長倉由佳さんが、今年12月10日（木）～13日（日）中華人民共和国・香港において開催される「第5回東アジア競技大会」の日本代表選手として女子200mに出場することが決まりました。

また、本学麻場一徳教授（本学陸上競技部監督）も大会

役員としての派遣が決まっており、12月1日（火）午後6時から都内のグランドプリンスホテル高輪プリンスホールで開催される日本代表の結団式には両名も招かれ出席することとなっています。

本学陸上競技部は麻場監督の指導のもと国内大会でも多くの選手が活躍し、優秀な成績を納めてきており、更なる発展が期待されています。

本学準硬式野球部1部リーグ 春・秋連覇

新関東大学準硬式野球1部リーグにおいて、本学準硬式野球部が春季リーグ戦優勝に引き続き、秋季リーグ戦も制し春秋連覇を達成しました。また、リーグ戦を通して最優秀投手として本学社会科学部現代社会専攻3年の佐々木裕紀さんが、春季リーグ戦に引き

続き表彰され、英文学科3年の牧田直也さんも最優秀選手として表彰されました。ここでの表彰選手は10月12日の関東選抜セレクションに参加し、エースでキャプテンの佐々木裕紀さんが、11月20日から名古屋で行われた全日本大学9ブロック対抗準硬式

野球大会の関東選抜チーム投手として活躍しました。準硬式野球部は近年活躍が目覚しく今後も全国に向けての活躍が期待されています。



春・秋最優秀投手、佐々木裕紀投手（左）
秋の最優秀選手、牧田直也選手（右）

文大だより

県民コミュニティーカレッジ分担講座

大学コンソーシアムやまなしが主催し、地域交流研究センターが共催する「県民コミュニティーカレッジ講座」の地域ベース講座が、今年は国文学科が中心となり、10月6日から27日の毎週火曜日に附属図書館4階学習室で開催されました。

今回の総合テーマは「文学

作品を通して、現代日本の諸問題を考える」として、第1回目は田中実教授が村上春樹の『レキシントンの幽霊』、2回目を新保祐司教授が大佛次郎の『天皇の世紀』、3回目を樋渡登教授が松本清張の『砂の器』、4回目を阿毛久芳教授が中原中也の『山羊の歌』『在りし日の歌』を題材にそ

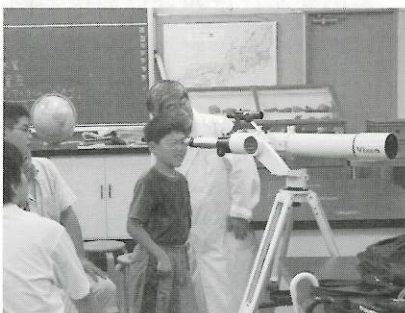
の文学作品や時代の舞台裏を解説し、市外から参加した方々も多く、熱心に聴講していました。



第1回目の田中実教授による講座

市民公開講座開催される

地域交流研究センター主催の市民公開講座が8月1日(土)、2日(日)の2日間、今年は初等教育学科理科教室が中心となり「親子で楽しむ夏休み自然・科学教室」として



天体望遠鏡に子ども達も興味津々

小学校児童とその親を対象に開催されました。

初日午前には坂田有紀子准教授と北垣憲仁非常勤講師による「自分だけの小さな博物館を作ろう」、午後は山森美穂准教授の「不思議なスライムの実験」、夜には中井均教授の「星座を探る天体観測」、また、2日目午前には山本安夫教授の「ロケット作りと電気の実験で遊んで学ぶ物理」、午後は吉住典子准教授の「いろんな色の木の葉のしおり作り」の5講座が企画実施され

ました。

また、今回は富士急行様との連携により環境にやさしい「Park & Ride」企画も実施され、都留市駅、禾生駅、田野倉駅の駐車場と電車を利用した本学講座参加者には記念品が贈呈されました。

この講座は夏休み期間でもあったことから多くの親子が参加し、特に天体観測には定員を上回る親子が集まりましたが、天候不順のため自然科学棟地学教室での天体ビデオ解説となり、参加者からは引き続き天体観測講座などを望む声が多く寄せられました。

同窓会が公立大学法人設立記念屋外時計を寄贈

9月15日(火) 昼に本学の公立大学法人設立記念として、同窓会から屋外時計が寄贈されその贈呈式が行われました。同窓会を代表して小林孝次会長からの挨拶の後に除幕式を行い、西室理事長から新たな時代に時を刻む記念品として謝辞がありました。寄贈された時計は、それまで同じとこ

ろにあった屋外時計を撤去し設置されましたが、電波式のため、これまでのものよりはるかに正確で夜間も明るいものとなり、本学の卒業生からの大学への発展を願う期待を含めての贈り物となりました。



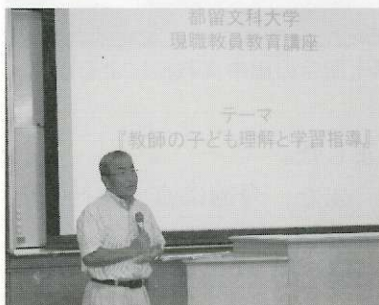
贈呈式において記念撮影

文大だより

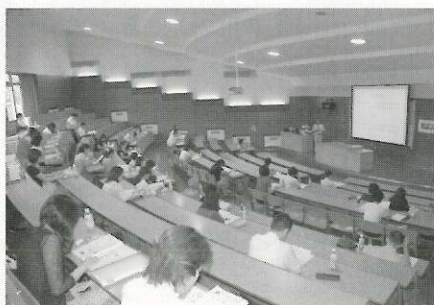
現職教員教育講座開催

恒例となっている本学現職教員教育講座が、7月29日から3日間の日程で、本学2号館101教室を中心に開催されました。昨年は、教員免許状更新講習の予備講習との併設講座もありましたが、今年

は従来の10年研修と併設講座として、『教師の子ども理解と学習指導』というテーマで、ひとりひとりの子どもの理解をベースに、子どもの思考や感情・感覚に即した学習のあり方を探ることを考える



最終日の杉本光司教授による講座



2日目の会場の様子

講座となりました。

7月29日(水)「子ども理解と学習指導」として初等教育学科佐藤隆教授、筒井潤子准教授、30日(木)は「国語科学習指導」を国文学科藤本恵准教授、「算数科学習指導」を初等教育学科植村憲治教授が実施し、最終日31日(金)は「今求められる情報教育リテラシー」を情報センター杉本光司教授が開催しました。

山梨県内はもとより近隣都県からも多くの現職教員の方々が参加しましたが、本学独自の視点から教育を考える場として次年度の講座にも期待される声が寄せられました。

教員免許状更新講習終わる

今年6月6日から主に、土曜日に開催された本学教員免許状更新講習は、全13日間21講習の日程を11月7日に総て終了しました。今回の講習は、同制度施行の1年目ということもあり、参加者も延べ252名と予想を下回る結果となりましたが、兵庫県や和歌山県など遠方からも参加する受講者がおり、講習内容に

ついては大変好評でした。
今後の同講習については、

竹下勝雄教授による
小学校図工教育の講習藤本恵准教授による
小学校国語教育Ⅱの講習

移行期であることから不安定な部分もありますが、本学もその変革には迅速に対応を図っていくこととなります。

秋季オープンキャンパス
7日間にわたり開催される

10月15日(木)から27日(火)の水曜日、土曜日、日曜日を除く8日間にわたり、秋季オープンキャンパスが開催され、例年どおり公開授業、進学相談、キャンパスツアー、学食

体験などを実施しました。今年は保護者を含めると、昨年を上回る259名の参加がありましたが、内訳で見ると3年生は減少傾向であったものの、保護者と1,2年生が増加傾向

にありました。また、このオープンキャンパス参加者の大半を占めている本学受験希望者からは、公開授業などを通じ大学の雰囲気が感じとれ、受験意欲が向上したなどの感想が寄せられました。

図書館
だより

中学生 本学図書館で職場体験!!

朝8時半、ジャージ姿の中学生が図書館の正面玄関前に集まってきた。職場体験学習の生徒達だ。これから何が始まるのだろうかとか少し神妙な面持ちである。

図書館は中期目標の一つとして地域貢献を挙げている。地域貢献で何が可能なのかを探っている中で、今年度初めて中学生による職場体験学習を受け入れることとなった。第1回が夏季休暇中の3日間都留第二中学校2学年10名。第2回が10月下旬の3日間都留第一中学校2学年6名であった。

初日は、本学図書館のサービスや資料選定から書架に並ぶまでの図書整備の講義を行い、その後館内見学、パソコンを使っての蔵書検索、電子資料の体験。また書架から図書を見つけ出すクイズを図書館から出題し、その図書を実際に見つけ出し、カウンターで貸出・返却する体験や、書架整理体験を行った。

2日目、3日目は、パソコンを使用しての図書の配架換え作業、図書の移動作業に執りかかった。生徒達は、スキャナーで図書のバーコードを読み取り、それらの図書を違う書架に移動する等、汗を拭いながら一所懸命に

取り組んだ。慣れない内は悪戦苦闘していたが、一旦慣れてしまったら

先に先にと進んで行き、予定の作業を遣り遂げてくれた。

職場体験の目的は、「各自が自己の適正に気づき併せて健全な職業観、人生観を身につける第一歩とすること。働くことの厳しさと楽しさ、社会人としてのマナーを理解し、どのような仕事も社会の中で重要な役割を果たしていることを知ること。普段の学校生活とは異なる活動をし、地域の人との触れ合う機会とする。」ということである。

彼らの中には図書館で働きたいと思っている生徒がいた。図書館の表の顔と、裏の作業を3日間で体得したとは思わないが、今後彼らが成長し公共図書館や大学図書館で働き、そうでなくても利

用する時に、手に取った1冊の図書が自分の下に来るまでに、多くの人達が携わっていることを思う姿が、そこにあれば良いなと思った。



本学附属図書館



説明を受ける都留第二中学校生徒



都留第一中学校による職場体験の様子

前期修了者卒業式

9月30日(水) 本部棟大会議室において、平成21年度前期修了卒業証書の授与式が行われました。

今回の卒業者は、学部、大学院を含め18名でした。



学長から卒業証書を授与される卒業生たち

編集後記

学外で学ぶ

重富恵子

今号は、英語圏事情研修を筆頭に学外学習に焦点をあてて編集されています。教育実習や博物館実習そしてインターンシップなど、仕事と関連する現場で実践し学ぶ機会の他、短期、長期の留学、海外語学研修、国内外での地域調査やフィールドワークと、本学には学外で学習するためのいろいろなプログラムがあるのだなあ、とあらためて思いました。

私も、9月初旬に学生とともに、「ニュージーランドの自然保護の仕組みと文化を知る」というテーマでフィールドワークを行いました。自然が豊かなニュージーランドでは、その自然を守るために多くの市民が保護活動に参加しています。

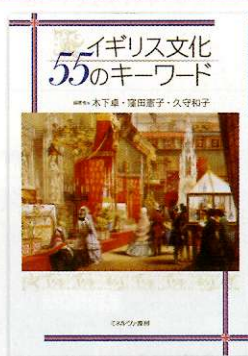
私たちが訪れたティリティリマタンギ島は、全島がほぼ禿山になった状態から、25年におよぶ一般市民の植林活動によって自然復元が果たされた島です。現在は同国でも珍しい、野鳥のオープン・サンクチュアリとして、一定の制限枠の中で観光客の訪問を認め、島固有の動植物に親しむ機会を提供しています。日帰り訪問が原則ですが、申請すれば滞在もできます。

日本人大学生グループの滞在としては我が校が初めてとのことでした。島の管理事務長みずからナイト・ウォーク案内をしてくださり、恐竜が跋扈していた時代からその姿を保ち続けている、生きた化石といわれるTUATARAをはじめ、帰巢したペンギンたちを間近に観察できるという幸運にめぐまれました。

市民ボランティアは動植物を解説するガイドも務めるのですが、彼らの中には年配の方も多く、お話を伺うと、植林活動も含めて何年もの間関わり続けていることが分かりました。ガイドとして説明するためには、島についての勉強は欠かせないし覚えなければならないことも多いし、知識だけでなく動植物をよく観察しておく必要があり大変だけれど、それが楽しいのです、と私たち以上に野鳥との出会いを喜ぶ市民ボランティアの姿はとても印象的でした。何度も何度もこの島を訪問し、時間をかけてじっくりと島を知り尽くそうとしているかのようでした。

いつもとは異なる空間、状況に身を置く中での様々な出会いからの学びは、予めプログラムに組んである学習にもまして、とても貴重です。本学が提供する機会以外でも、私費留学、ホームステイ、ワーキングホリデー、ワークキャンプなどで、多くの学生が様々な体験や学習をしてきたことと思います。もちろん、学外での学びはなにも海外に限ったことではありません。地元都留の探索もしかり。また、研究機関や専門機関を訪ねたり、他大学の図書館を利用してみたりするのも興味深いものです。

とはいえ、学外で体験する様々な事柄を理解するためには、学内での準備と振り返りが必須でしょう。この夏の一期一会の実りを、この秋を通じてさらに豊かなものにしていきたいものです。



木下卓・窪田憲子・久守和子／編著
2009年6月出版
ミネルヴァ書房 2,400円＋税
◇くぼたのりこ 英文学科教授

イギリス文化
55のキーワード



楠元六男・深沢眞二／編
2009年7月出版
笠間書院 4,800円＋税
◇くすもとむつお 国文学科教授

おくのほそ道大全



楠元六男／編
2009年7月出版
竹林舎 12,000円＋税
◇くすもとむつお 国文学科教授

江戸文学からの架橋
―茶・書・美術・仏教―

本
ぶんだい堂

